
《シンポジウム》

共通テーマ 「家族・学校・地域の再生を考える」

パネラー 北翔大学大学院教授・大正大学名誉教授 村 瀬 嘉代子
関西学院大学人間福祉学部教授 才 村 純
札幌学院大学人文学部教授 安 岡 譽
司 会 札幌学院大学人文学部教授・総合研究所長 松 本 伊智朗



松本 札幌学院大学人文学部創立30周年記念シンポジウムを始めたいと思います。私は司会を務めます人文学部の松本と申します。よろしくお願ひいたします。午前には奥谷学部長からご挨拶がありました。我々人文学部は昨年で創立30周年を迎えました。午前中は「地球と人類の未来」と題して、かなり大きな視野で現状とこれからについて石弘之先生からお話がありました。午後は、「家族・学校・地域の再生を考える」と題して、身近な日常生活に引き付けて、パネラーの皆様と共に考えてみたいと思います。「再生を考える」ということは、これからを考えるということでもあります。現状の家族や地域が抱えている様々な困難を共に語りながら、これからの考えていきたいと思ひます。パネラーの先生方のご紹介は時間の関係で省略させていただきます。村瀬嘉代子先生には「自らも生き、周囲も生かす」、才村純先生には「子ども虐待防止の観点から」と題してお話いただき、本学の安岡譽先生からは「家族における人間の再生」と題してお話いただきます。

■「自らも生き、周囲も生かす」

北翔大学大学院教授・大正大学名誉教授 村 瀬 嘉代子

札幌学院大学人文学部創立30周年記念という貴重な機会に、しばらくの時間ですが、皆さんとご一緒に考える機会を与えていただき、大変有難く思っております。テーマにそってお話したいと思いますが、地域が活性化していくということは、抽象的に、あるいは物事を対象化して考えていくだけでは、現実には分かって参りません。ですから、私が一人の臨



床心理学を専門とする人間として、専門家としてだけでなく、普段の自分の日常生活の中で、こうしたテーマをどう考え実践してきたかを、かいつまんでお話ししたいと思います。

人の心というものは、これが心だというように手に取って見ることはできません。しかし、心がどういうものなのかを考えてみますと、平たい言葉で言うと、人が自分自身をどう捉えているのか、人や物にどう関わろうとするのか、その関わり方にその人の心が表れているかと思えます。自分の人生を享受し、資質を応分に発揮し、お互いの存在をいたわり合い、理解し合って、自分らしく生きる。これが、人が自分の生を全うしているということではないかと思えます。

一方、考えてみますと、地域社会の人間関係の崩壊が指摘されて久しいことです。例えば、私は北海道に何度かお招きいただいておりますが、北海道では帯広など、元々非常に広い地域の中に家が点在していることに加えて、隣の人のことを何も知らないで暮らし、地域社会から人間関係が薄くなっているという現実があるかと思えます。いわゆる職住分離が進み、日本の長時間勤務についてもずい分指摘されていますが、文明先進国の中では日本の労働時間の長さは変わっておりません。また、不規則な勤務形態が、家族の生活や近所の人たちとの交流の機会を奪っているという現状もあるかと思えます。私共は、文明が進歩したことにより、社会が高度に工業化し、色々な面で便利になってきましたけれども、便利になるということが、決して人間にプラスの影響だけを与えているわけではありません。

おそらくそうした問題については、午前中の記念講演で様々な角度からお話があったと思いますが、まず便利になると、人間の感性や自発性がだんだんそがれて鈍くなっていくと思えます。例えば当節で言うと、空調設備が基本的に整っていて、快適な温度であるのが当り前のようになっています。本当は、朝起きてその日の空の具合、風の吹き方を見ながら、秋も深まったなあと感じて、何を着ていこうか、暑ければ一枚脱ぐといったように、対象と自分との関係

性の中で意識的・認識的に自分の行動を選び取ることができます。そうすることで、実は物事を観察し、観察に基づいて振舞うというセンスが育ってきます。自動ドアの前に立つと、ドアが独りでも開きます。例えば、重いスチール製のドアですと、乱暴に閉めると響くので、そっと閉めようとか、とても滑車の具合がよく効いていて軽く動くドアであれば、ピシャッと音がするからこんな風に閉めようというように、入口一つをとっても一つ一つ意識しなくても、そうした日常生活の中で私たちは、自分の観察眼をもとに振る舞い方を選び、その中で感性、センスというものを育ててきたものです。しかし今は、環境が自分に対して快適であるべきだということに私たちは生きていて、そういうセンスはだんだんと鈍くなっていくわけです。

さらに、例えば小学校でのことですが、暑くなってきたので子どものカーディガンを脱がしてくださいという電話が保護者からたくさんかかってきて、先生の対応が大変だというようなことがあります。人間が便利さを享受することはいいのですが、それによって失われるものがあることを注意しなければならないと思います。

また、現代は生産効率を重視し、早く、たくさん、上手に、均質にということが重んじられています。これは、人によっては一生懸命やっても、その人の資質によって無理なこともあるわけですが、そういう微妙な個人差に配慮し、お互いに補い合うとか、助け合うというような惻隱の情が摩滅しています。今は豊富な視覚情報が溢れています。テレビを始めとして、インターネットで一瞬にしていろいろな情報を入手できるわけですが、本当はどうやって調べれば、知りたいことを自分は手に入れることができるのだろうかという、そのプロセスや努力がとても大切です。受身的な立場でいても、十分に情報が入ってくると、人は次第に受け身になり、自分で観察し、発見したり、自分で試してみたり、探したりという能動的な姿勢を減退させていくわけです。

また、近代社会のなかでの生活とは、1日24時間と区切られていて、仕事や職業の都合もあり、時間が制度化され、区切られています。そうすると、次第にこの流れに沿って、それに任せ、流されるように生きていくような姿勢が固定化しがちですが、一方で、一人一人個人としての時間の意味があるはずで、もちろん、雇用年齢の標準や、ある種の共通の時間の感覚も必要ですが、人の精神的な感覚は個人差があり、その人にとって必要な時がくる時熟（じじゅく）ということを考えるセンスも大事です。そしてまた、この時間は本当に自分がやりたいこと、考えたいこと、この対象と真剣に向き合いたいということの意味づけられたものなのかどうか。私たちがその時間を真に自分の時間として生き切るといような、そういう「生きられた時間」というものを自分の生活の中に持っているかどうか。そういうことを考えてみますと、今の生活はそれをかなり難しくしているようなところがあります。

最近では建物一つをとっても、個人の住宅などは限られた空間をいかに合理的に効率よく使うかということで作られます。設計上合目的であることはいいのですが、私たちは使用目的が決められ、非常に合理的に固定化されたところにだけ暮らしています。皆さんは子どもがどんな

空間で遊ぶのを喜ぶか、ご覧になればお気づきだと思いますが、子どもは自由に想像を巡らして、そのつもりになって遊べる空間がある方が精神的に生き生きして、遊びにコミットできます。それが精神的成長につながるということもあります。今、家の中でゆとりのある踊り場や、ちょっと余裕のある物置、そういうように、きちんと決められたものでない場所、その空間に行って、想像を巡らしながら、その空間を自分なりに使うというような場所が少なくなっていると思います。

例えば、公園ひとつをとっても、ジャングルジムなど、目的がきちんと決まった遊具がありますが、東京のある区で、新しく児童公園を造る際に、子どもたちにどんなものを置いてほしいか、アンケート調査をしました。皆さんは何が一番多かったとお思いですか。それは「穴」です。「穴」と大きな「山」です。あまりに目的がはっきりして、ぐるぐる渦巻きになった滑り台や、やり方が決まっている鉄棒のようなものより、穴があって、洞穴ごっこをしたり、それを家に見立てたり、色々な遊び方をしたい。山もそうです。そういうようなことで、実は合理性というのは、本当にクリエイティブな想像力を巡らし、考えを深めていくというような、人間のそういう営みを少し損なう側面もあるということを時々思い出さなくてはなりません。昔の家がいいと単純に言う訳ではありませんが、近代文明の便利さを享受しながらも、それがもたらす歪みをどれだけ少なくするか、そこがとても大切なことだと思います。

これらのことを基本的に貫いているのは経済性です。現代は多くのことですべて経済性が基点にされることが多く、そこからいろいろな問題が起きてくるわけです。今日の統一テーマにありますように、家族や地域社会の再生を考えますときに、本当に個人一人一人に向き合わなくてはなりません。その人がお金があるとか、たくさん仕事ができるとか、決してそうした能率主義的な観点から人を見るのではなくて、人というのは、その人その人、一人一人存在することに意義があるということをしかり自分の意識として自覚できるかどうかを抜きにして、家族や社会の再生を考えることは、難しいのではないかと思います。

私の専門は心理療法を中心とするいろいろな心理的援助です。心理療法の本質がどこに存在するかを普通なかなかはっきり言葉にして問いませんが、皆さんは心理療法の本質はどこにあると思われますか。書物の中に精神分析理論としてあるのか、あるいは認知、行動療法などがあると思われますか。それとも、セラピストが心理療法を行うその部屋の中で、その方が標榜される理論を使っていられるその時に、その心理療法の理論なり実体があると思われますか。

精神科医の青木省三先生が、心理療法というのは究極、それを行う人の存在自体、つまりその人の生き方の中に存在するというのが本当ではないかとおっしゃっています。つまり、書くこと、話すこと、それから振る舞いが一致していることが必要です。土居健郎先生も同じようなことをおっしゃっています。土居先生は、専門性はやはり人間性に裏打ちされてこそ本当に質の高いものになると、非常に印象的な講演をなさいました。そういう意味で、知識や技法が人間性と表裏一体となること、そのことが今日のテーマの地域社会の再生ということの基底に

なければならないと思います。地域社会の中で人間の尊厳を見出すのは、基本は個人のあり方です。こういう話は、総論賛成、しかし各論は反対、あるいは一般論として大事だと誰でも言うのですが、自分が日常の一人の市民の生活のなかでそれをどう引き受けるかということになると、なかなか引き受けにくい要因が非常にたくさんあるというのが実状だろうと思います。

先日もテレビであるシンポジウムが放映されていました。それは、差別があってはいけない、地域社会で住んでいるときに、国籍などの条件で差別してはいけない、というような主旨のシンポジウムでした。その主旨について、シンポジストはもちろんみんな弁舌爽やかに賛成だと主張されたのですが、司会者がふと「それでは先生、先生のマンションのお隣に、こうこう、こういう感じの人が越されてきても、先生は諸手を挙げてにこやかに隣人として交際なさいますか?」と聞かれました。それまで自信たっぷりにお話になっていた方がぐっと詰まられて、「それはそうだ。ちゃんとやっていくと言わなくちゃ」と考えて、かなりタイムラグがあってから、「そのように交際します」とおっしゃいました。これは、私たちの中にもある感覚ではないでしょうか。これをどのように自分の課題として乗り越え、振る舞うか。理屈だけ立派なことを言っている、なかなか実態が伴っていないと思います。これは難しいことです。

何十年も前のことですが、私は大学を卒業した後、家庭裁判所の調査官をしばらく致しました。そのとき、例えば非行少年の事件を担当して、共犯の窃盗事件などを調べるのに1日に面接しきれなくて、何日かに分けて共犯者に面接したことがあります。今日では女性の調査官は珍しくなくなりましたが、当時は裁判所の中に専門職の女性がいるのが本当に珍しく、少年たちは呼び出し状を見て、女性の名前なのでびっくりし、非常に怖い、権威主義的な人が出て来るかと思ったら、大学を卒業したての女性が出て来たので、少年たちは家に帰っていろいろ相談したのだと思います。そのようななかで一連の調査が終わり、少年たちはそれなりにだんだん素直になり、また素直なやり取りができるようになりました。

当時私は一人で下宿住まいをしていて、部屋は2階でした。そういういきさつの中で、夜、窓ガラスに石が当たる音がしました。静かに耳を澄ませていると、また石が当たるのです。そこで窓を開けてみると、窃盗事件で面接した子どもたちがいて、「やっぱりここに住んでるんだ」という声が聞こえました。その子どもたちは、家庭にも世の中にも居場所がなく、夜も落ち着くところがなく、フラフラしていたのです。その子どもたちは、私が家庭裁判所の裏門から帰るのをつけてきて、私の住所を探し当て、ひょっとしてあの先生と遊んでもらえたらいいなと、訪ねてきたことが分かりました。裁判所の職員は、調査の上では調査対象者とお茶一杯飲むことも控えているので、子どもたちを招じ入れることはできません。私は、彼らが14-15歳でこれから立ち直っていくのに必要な約束事項として、例えば普段からいい友達を見つけ、悪友とは付き合わないなどと、判で押したような言葉を言うのですが、しかし考えてみますと、今少しく道を外れかけている子どもたちと、まっしぐらにルートに乗って勉強に励んでいる恵まれた生徒たちとが、進んで友達になれるかということ、それはとても難しいことです。友達に

なれるということ而建前として言っても、いい友達を見つけるのは非常に難しいのです。疎外されていた子どもが変わっていくためには、大きな制度よりももう少しきめの細やかな居場所を提供することが必要であると思ったのが、そのときの問題意識でした。しかし、そのためには、私がそういう人を招き入れても大丈夫な、私の基本が歪まないような生活をしなければなりません、それはできませんでした。独身で裁判所職員で一人で暮らしているときにはそういう問題意識があって、いつかそういうことをできればいいなと思ったのが、四捨五入すると、50年くらい前のことです。

近年、養護施設の子どもさんなど、夏休みやお正月にどこにも一時帰宅するところがないという、背景事情の厳しい人がますます増えています。そういう時に、私は平成4年ころからのことですが、お正月にできる範囲で家に子どもさんと呼び、その子どもさんたちの年齢や何が必要なのかを聞いたりします。家庭的できめ細やかなやり取りの中で、説教がましい話はしませんが、短い時間でも日常生活を共にすることで、相手を気遣う、相手の気持ちを大事にする、分かち合う、ちょっとしたヒントからでも気がついて、次の励みになるような言葉にしていこうにしています。ある時は、ご両親が海外赴任されましたが、高校生の子どものさんの受験を考えると、どうしても連れていきたくない。そこで、全寮制の学校に残していったのですが、ご両親はとても心配されました。寮には日曜日の昼食がないので、お宅に昼食を食べに行かせてもらいたいということでしたので、私は10ヶ月間、高校生に毎日曜日昼食を用意しました。当時は主人の母も存命で同居していましたので、日曜日は本当は朝昼兼用で、ちょっとゆっくりしたいとか、お茶漬け程度で済ませたいところですが、そういうわけにもいきません。その中で、先程申しましたように、人の心というのは文明化の中で疎外されていくものもあるのですが、決して希望がないわけではないと思いました。これに似たようなことを一つ例示します。

私が今東京で住んでいるところも、前に住んでいたところも、本当に不自然なことですが、1年のうちにお隣の人と2・3回しか出会いません。隣近所のお付き合いはほとんどなくて、特殊なところですよ。しかも、その公立学校には他の地域から受験のために越境入学してくる子どもさんがおり、かなり人工的な地域ですが、その地域の出来事です。私の息子が小学校4年生のときに、お隣の席に非常に重い自閉症の子どもさんがおりました。担任の先生は、大変意識の高い地域なので、そういう子どもとわが子が隣になると、学力に差し障ると心配する親もあるであろう、そこはクラスの95%くらいが中学受験をするという小学校だったのですが、その自閉症の子どもがうちの子の隣になったと父兄から苦情が出ないようにと、配慮されたのでしょう。担任の先生は私の職業を考え、その子を理解してほしいと、私の息子と席を並ばせられたのです。私は息子が一人っ子でもあり、そうでなくても長い人生の中で、そういう経験は負担が重くても、それを超えて意味があったとなればいいと思いました。一方では、小学校4年の息子が毎日帰ってくると、「疲れた」と言います。自閉症の子はケンちゃんというのですが、息子はケンちゃんの面倒をいつもやってあげているけれど、すごく大変だ、疲れたと言って寝

るのを見て、私の気持ちの中に何も葛藤がなかったと言えば、嘘になります。でも「少し寝たら、また元気が出るから」と言って、唾の一杯入った筆箱を洗ったりしていました。

4年生ではお誕生日に互いに招き合いますが、5年生からは受験に集中するのが当然という地域で、私の息子は土曜日にはどこに行こうか迷うくらい、たくさんの友達から声をかけていただくという幸せな友達関係にありましたが、ケンちゃんはそんなことはまったくありません。この子のお母さんは父兄会に一度もいらしたことがありません。そういう地域ですから、お母さんは気を遣っておられるのだろうと考えたわけです。私は自信がなかったのですが、一人の親として、自分の人生で一回もお誕生日に呼ばれたことがないなんてと思い、つい息子に「今度、ケンちゃんをお誕生日に招こうと思うんだけど」と言うと、息子は「うーん、それはいいけれど、皆に成績を良くしてもらうためにやったと思われるといじめられるから、どうしよう」と言うのです。「大丈夫、そんなこと言わないと思うし、別に成績が良くなるわけじゃないからいいでしょう」と、私は先生にそのことを相談しました。先生は「自分の周りの父兄から苦情が来るのではないか、ケンちゃんはまったく参加できないし、どうしようかと本当に頭が痛かったけれど、あなたのお手紙を見て涙が出るほど嬉しい。是非、お願いします」と言われました。ケンちゃんのお母さんは周りと交渉がなく、大きいお家に住んでいる方でしたが、「ケンを呼んでくださって、有難うございます。でも、ケンが何かお宅の物を壊しても、何も責任は持てませんから、おうちの中をきれいに片付けて、あとで何が壊れたとか仰らないでください」と言われ、「はい、分かりました」と答えました。

息子の誕生日の土曜日は土砂降りでした。私はたまたま仕事があって、ゴミ捨てに出ると、土砂降りの中にケンちゃんが傘もささずに、私の家の門の前で小さなリボンのついた小箱を捧げてひざまずき、ずぶ濡れになっているのです。私は本当に息が止まるほどびっくりして、洋服を乾かし、傘を持たせて、学校へ行かせました。午後、クラスの男の子たち全員が参りまして、私はそんなにたくさんのカレーライスを作ったことがなかったので、分量を間違えて口から火の出るようなカレーを作ってしまった。他の子たちは「子どもの味付けを知らないのか、口の中が火事だ」と大騒ぎでしたが、他のもので何とか凌ぎました。ところが、給食は何も食わず、牛乳だけ飲んでいてケンちゃんが、カレーライスを2皿食べて、率先して私のところにお皿を運び、手伝いをしてくれました。もちろん皆と一緒にゲームなどはできず、私がお相手をしていました。そのうち落ち着かなくなったので、先にケンちゃんを送って行ったのですが、そこからです。

普段はケンちゃんのご飯も食べない子なのに、手伝いまでしたのです。4年生の子どもたちも、人が場所と相手によって違う行動をするということに気がついて、その後ケンちゃんは5軒の家の誕生日に呼ばれました。そして、子どもたちの観察によれば、同じケンちゃんでもこちらの対し方によって違う行動をすることが分かりました。ものすごく気を遣って、先回りしてあれこれ言うお母さんの前では、ケンちゃんはイライラしてパニックになります。ほどよく

気を遣って、しかもまかせられるようなお母さんのところでは、割と落ち着き、学校にいるときよりもよくいろいろなことができた。そういうことを子どもたちが観察して、先生に話しました。それが契機で、お母さんも父兄会に来られるようになり、子どもたちもクラスで、人を見かけだけで決めてはいけない、障害があって変わっていてもこちらの対し方次第で一緒にやっつけられるのではないか、と話し合ったと聞きました。その子どもたちも今は40歳になんなんとしますが、恵まれた経験をした子どもたちが、重篤な障害を持っている子どもを連れて遊ぶにはどういうところがいいのか、その時の経験を生かしながら、こういう状況でも気持ちを分かち合って生きていくにはどうすればいいのかを考えてくれたわけです。

私はこう考えています。ものを考える時には、一人称、二人称、三人称という区別があります。研究や調査をするというのは三人称で行います。何々にはこういう原因があり、こういう対応をすればいいというのが、三人称的視点です。一人称は、もし私であれば、という視点です。二人称は、そういう問題や視点を持っているあなたたちはどう考えるだろうかという視点です。本日のシンポジウムのテーマにあるように、地域社会の活性化を考える時に、無理をしないで、しかしただ評論するだけでなく、自分たちの中でどういうことができるだろうと、一人一人が一人称で考える時には、たとえこれだけ文明が高度に進んできて、地域社会の再生は不可能だということはない、と私は考えています。

松本 有難うございました。冒頭から一人称の視線で見ている人としてお話を始められ、最後までそういう観点でお話をまとめられたことに、私は非常に感銘を受けました。では続いて才村先生にお話をお願いいたします。

■「子ども虐待防止の観点から」

関西学院大学人間福祉学部教授 才村 純

皆さん、今日は。今、村瀬先生から、視線の一人称ということで、非常に具体的に興味深いお話をしていただきました。私は長年役人をしていましたので、これから申し上げることは、どちらかと言うと、子ども家庭福祉政策にかんすることがメインになると思います。そういう意味では、恐縮ですが、三人称的な内容になることをご理解いただきたいと思います。



その前に、札幌学院大学人文学部創立30周年という非常に栄えある行事のシンポジストとしてお招きいただき、本当に光栄に存じております。

私は、子ども虐待防止の観点から、地域の学校、家庭の再生を考えてみたいと思っています。資料のグラフ [本書53頁 1(1)] は、虐待されているのではないかと、全国の児童相談所に相談のあった件数の推移を示しています。厚生労働省が統計を取り始めたのが平成2年度で、当時1,101件でした。その後、増加の一途を辿っており、最近では平成19年が4万618件で、ついに4万件を超えてしまいました。ちなみに、児童虐待防止法ができたのが平成12年で、平成12年度は1万7,725件です。その数年前から増加が著しくなり、何とかしなければならぬということで、防止法の制定につながっていくわけです。しかし、その後も増加の一途を辿っているのが現状です。ただし、これはあくまで相談件数の推移ですから、虐待がこの数字と同じほど増えているのかというと、必ずしもそうではありません。この相談件数の増加の背景には二つの要因があります。その最大の要因としては、虐待問題に対する社会の関心・理解が高まってきた結果、以前であれば見過ごされていたものが相談されやすくなったということがあげられます。しかし、そうは言いますが、相談件数ほどではありませんが、虐待そのものも増えているのです。これが二つ目の要因です。虐待まではいなくても、その一歩手前のような非常に不安定な状態の件数が増えていることが、最近の様々な調査研究で明らかになってきました。相談されやすくなったことと、これから申し上げますが、子育て不安、虐待そのものが増えているということ、この二つの要因があいまって、相談件数の加速度的な増加という現象が現れていると考えられます。

それでは、どうして虐待、あるいはその一歩手前の子育て不安がこれほど深刻化しているのかについて、お話しします。

そこにある棒グラフ [本書53頁] をご覧ください。これは「自分の子どもが生まれるまでに、小さい子に物を食べさせたり、おむつを換えた経験はありましたか」という設問にたいする回答の推移を示しています。1980年に大阪の研究グループが、例えば1歳半健診や3歳児健診、いわゆる乳幼児健診に来た親を対象にアンケート調査をしました。その23年後の2003年に、兵庫の研究グループも同じことを聞いています。ですからこのグラフは、この23年間で子育てにたいする意識、子育ての事情・環境がどのように変化したかを比較しています。そうすると、小さい子に物を食べさせたり、おむつの交換をしたことがある、両方ともあったという回答は22%から17%に減っています。逆に、そのようなことがなかったという回答は41%から56%に増えています。つまり、56%というと、二人に一人以上のお母さんが、自分の赤ちゃんを産むまで、他の赤ちゃんとじかに接したことがないことになります。ただここで問題になるのは、片や大阪の住人、片や兵庫の住人で、これらが単純に比較できるのかどうかということです。しかし、いずれも調査に協力しているのは阪神間のベッドタウンの住民ですから、地域差は無視していいと考えています。

次のグラフ [本書54頁] ですが、「近所にふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする人がいますか」という設問です。下半分が大阪の回答で、上半分が兵庫の回答です。これを見ると、子供の年齢にかかわらず、いずれも数名いると答えた人が減り、「いない」という答えが増えています。それだけ共通の話題で話ができる相手がいないという人が増えているわけです。その下は育児にかんすることで、「今まで不安なことがありましたか」という設問です。これも、子育てにいつも不安を感じるという人が大幅に増えています。逆に、不安はあまり感じないという答えが減ってきています。さらに、「育児でイライラすることが多いですか」に対しては、「はい」という答えが大幅に増えています。最後に、「子育てを大変と感じますか」という設問ですが、これは大阪では聞いておらず、兵庫の調査で初めて聞いています。いずれの年齢の子どもを持つ親も、年齢に関わりなく、半分以上が「大変だ」と答えています。こういうところから見えてくるのは、ひとつは都市化、核家族化が進んで親が非常に孤立してしまっていること、もうひとつは、少子化の影響ですが、幼い頃から小さい子どもと関わり合う経験がないということです。ここからは、子どもにどう関わっていいのかということにかんする親の戸惑いが見えてきます。

次に、「変貌する家庭」 [本書55頁] とあります。最近、子どもと家庭をめぐる状況は大変大きく変化していると言われていています。学校でのいじめの問題もそうですし、少年事件が低年齢化しています。さらには社会的引きこもり、家庭の中で子どもへの虐待、逆に子どもが親を殺害するなどの事件が発生し、ドメスティック・バイオレンスと並んで、問題が非常に深刻化しています。まさに、子ども、家庭が危機的な状況にあると言っていると思います。もちろん、家庭が追い詰められていく背後にいろいろな社会的経済的状況の変化がありますが、少なくとも子ども、家庭、福祉の立場から、今子どもたちにどういうことが起きているのか、これに対してどうすればいいのか、こうした問題についての提案ができればと思います。

「変貌する家庭」についてですが、ひとつは父親の不在と母子の密着関係という問題があります。父親の不在にかんしては、物理的不在もありますし、一時的不在も指摘されています。確かに、都市化に伴い、職場近くに家を持つことは難しく、どんどん長距離通勤化しています。あるいは、慢性的な時間外勤務のところも少なくなく、そうした物理的不在があります。それと同時に、以前は家庭が生産の場であって、父親の姿を見て子どもも「お父さんのようになりたい」と尊敬の念を抱いたわけですが、最近の父親は仕事に行って疲れきり、休みの日は軒を叩いて寝ているというように、父親と子どもとの接触がほとんどなくなっています。その分、母子の密着関係、つまり、夫には期待できないということから子どもへの期待が強まるという関係が出てきます。特に、父親の協力が得られず、母親自身が何でもこなしていかなければならないというような状況の中で、母親がどんどん精神的に追い詰められていき、子育てに自信をなくし、最悪の場合は虐待してしまうという状況があると考えられます。

次に、「社会化機能の低下」とあります。家庭という場は、言うまでもなく、子供の社会化

を形成する場ですが、家庭におけるこうした社会化機能も低下しているのではないかと考えられます。特に、ペット化される子どもたちの問題があります。これは、少子化の影響で、幼い頃から赤ちゃんに関わる経験がどんどん希薄になっていて、それこそ自分の赤ちゃんを産んで初めて赤ちゃんにじかに接することから出てくる問題です。今の若い人たちは、どういうところから赤ちゃんのイメージを得るかという、圧倒的にテレビからです。テレビのコマーシャルなどで取り上げられる赤ちゃんは、非常にステレオタイプです。非常に美しい、おむつもおしっこも青く、可愛い赤ちゃんばかりです。これはまさに象徴的で、赤ちゃんが非常に従順で、まさにペット同然なのです。しかし、現実の赤ちゃんはペットのようにはいきません。一生懸命離乳食を作っても全然食べてくれない。なかなか泣き止まない。現実の赤ちゃんを育てることはそれはそれは大変なことなのですが、テレビに出てくるペットのようなイメージを赤ちゃんに持っている、現実には赤ちゃんを持った場合、母親が非常に戸惑ってしまうこととなります。

そこで「二つの悲劇」ですが、親が子どもに対して非常に美化したイメージを持ち、それに子どもをはめ込もうとします。つまり、親の期待を子どもに一方的に押し付けようとするわけです。そうすると、ひとつは最初から親の期待にそえないという状況が生じます。親はいろいろ子どもに期待し、子どもはその期待に応じて一生懸命努力しようとしていきます。子どもにとっては親の期待にそえないということは、親の愛情をなくしてしまうことになるからです。だから、子どもは一生懸命努力するのですが、なかなか親の期待には応えられない。そこで親の方もイライラ、カリカリし、子どもは敏感にその気持ちを察知して、自信をなくしていき、ますます親の期待に応えることができなくなって虐待に至るといふ悲劇が生まれます。もうひとつの悲劇は、少なくとも表面的には親の期待に答えているように見える子どもは、一生懸命に努力しますが、しかし、そういう中でやはり慢性的なストレスを積み重ねていくことになるということです。これらの悲劇は、いずれも臨界点に達したときに、いろいろな問題が出てきます。

特に、二つ目の悲劇にかんしては、象徴的な事件があります。2年前の夏でしたか、奈良県の医師の家庭で、とにかく小さい頃から父親からスパルタ教育を受け、成績が少しでも落ちると、殴る蹴るの暴力をふるわれていました。そこで長男は父親を恨むようになり、そのことは自分自身をも恨むことになるのですが、その挙句に父親を殺害する目的で、家に放火をしました。ところが、父親は助かったのですが、不幸にして母親ときょうだいが死んでしまうという事件でした。放火という行為は非常に象徴的です。家というのは家族の象徴であり、自分が生まれ育った器でありますから、自分自身の象徴でもあります。それを全て消し去るわけですから、そこには象徴的な意味があります。いずれにしても、今申し上げた事件は極端な例です。しかし、大変陰湿ないじめも、子どもが親の期待との関わりで過剰適応を強いられていることがひとつの要因と考えられなくもありません。

もうひとつのケースは、これとは逆に、親から放置された場合です。今申し上げた例は、ど

ちらかというと、放置の逆です。親が過度に我が子に期待を寄せすぎてしまい、あれこれと過保護、過干渉に陥っている例です。これとは反対に、親自身が子どもに無関心で、子どもの利益よりもまず自分たちの利益を優先させる結果、子どもを放置してしまうという事例も、最近増えてきています。例えば、いつも子どもにコンビニ弁当を食べさせ、それでよしとしている親も少なくありません。さらには、小さい子どもを家に残して毎晩のようにカラオケに行くとか、ゲームセンターに入り浸るといった親も増えていと報告されています。

三つ目はしつけにかんすることです。最近、学校に対して、教育は自分たちでやるから、つまりこれは子どもを何とかして塾に通わせるということなのですが、その代わりに学校ではしつけをしてくださいと要求する親の話聞いたことがあります。近頃モンスターペアレントという、非常に理不尽で、身勝手な要求を一方的に学校側に突きつける親が増えていと言われています。例えば、子どもが朝起きないから先生に迎えにきてほしいとか、親どうしの仲が悪いので、子どもたちはすぐにクラス分けをしてほしいなどです。学校の近くにスーパーマーケットができる話があり、学校はそれを認めるのか、我が子が万引きをしたら責任を取ってくれるのか、そういうことを訴える親もいるらしいです。先日も警察の人と話をしていたのですが、例えば万引きで子どもを補導するとします。そうするとある親は、万引きなんてみんなやっている、どうして自分の子どもにだけこういうことをするのか、それはいじめじゃないかと、警察に食ってかかるそうです。補導すると親を呼びますが、警察が勝手に捕まえたのだから、家まで送ってくれるのが当然だなどと、理不尽なことを言う親もいるらしいです。いずれにしても、こういう親のもとでは子どもがどういうふうにつくか、想像に難くないわけですね。

話はちょっと飛ぶようですが、いわゆる虐待ということにかんして言えば、われわれはどうしてもひどい暴力、ひとつ間違えると子どもが命を落としてしまうような、非常に重篤な行為を思い浮かべます。これはマスコミの影響だと思います。つまり、親の暴力で子どもが命を落とすようなきわめて悲惨な事件になると、マスコミがそれを取り上げます。ですから、われわれは日頃そういう記事を読むと、子どもの生命に関わるような深刻なものだけをもって、虐待ととらえてしまいがちです。しかし、これはほんの一部にすぎません。そこまではいなくても、いろいろな虐待があります。いずれにしても、虐待というのは子どもの健やかな育ちを阻害する行為であって、親の事情は一切関係ありません。たとえ親に愛情があっても、結果的に子どもの心身の健やかな成長・発達を著しく損ねていけば、それはすべて虐待とされます。したがって、モンスターペアレントのような理不尽な親の元で育つということは、まさに虐待的な環境といえます。つまり、親が世の中のルールをきちんと守り、節度をもって生きる姿を目の当たりにすることで、子どもは健やかに育つわけですから、モンスターペアレントに象徴されるように、最近の親は子どもの健やかな成長を保障しきれていません。そういう意味で、虐待的な環境に置かれている子どもたちが増えていといえます。

次に、こうした状況のなかで何が求められているか、いくつか提案させていただきます。ひ

とつは、「子育て支援サービス」の充実です。これは言うまでもなく、先に述べたとおり、親が孤立無援のなかで追い詰められていく状況が一般化しているわけですから、親が追い詰められないようにいろいろな子育て支援策を講じていくことです。親どうしが交流できるような場を設定していくことに特に力を入れていく必要があるのではないかと思います。二つ目は、「おせっかい型サービス」の充実です。児童相談所の人たちとお話をしていると、もぐら叩きのような状況がいつまで続くのかということをよく耳にします。こちらで虐待の通報があれば、そこへ飛んでいって対応しなければならず、まだそこが解決していないのに、またあちらから通報が入るというように、常に振り回されているという状況をいつているのです。一番大事なのは、子育て不安を抱える親が虐待まで追い詰められないようにすることです。病気と同様に、早期に手当てして虐待を防ぐことが大事であるとよく言われます。子育て不安を抱える親に対して支援をしていくときに、注意しなければいけないことがあります。「子育て支援サービス」が充実されたとしても、子育て不安を抱えて自信をなくしている親は、なかなかそういうサービスを積極的に利用するという心理状態にはないのです。例えば、気軽に相談にお越し下さいと言われても、なかなか相談に行けません。実際にそういうことはないのに、健診に行けばお医者さんに叱られるのではないかと思いつ込んでしまっているわけです。ですから、自らアクションを起こせない。ところが、従来の子育て支援サービスは、申請主義といいましょうか、親自身がアクションを起こさないと向うからはサービスが来ない仕込みになっています。子育て不安を抱える親のことを考えますと、当事者からたとえ願ひ出がなくても、こちらが必要と認めた場合には積極的に親を支援していくという意味での「おせっかい型サービス」が必要であると考えられます。

こうした状況のなかで、平成16年に「育児支援家庭訪問事業」が国の制度としてスタートしています。これは、市町村が必要と認めた場合には、支援員（これは専門家である場合もあるし、ボランティアの場合もあります）として必要な人材を派遣し、親をサポートをしていくシステムです。例えば、離乳食の作り方が分からず悩んでいる親がいれば、栄養士などが出向きます。双子や三つ子を抱えて親が大変だという場合は、家事をお手伝いします。こうすることによって、お母さんは少し余裕を持って子どもの相手をすることができます。そういう事業がスタートしています。さらには「こんにちは赤ちゃん事業」があります。昨年事業が開始しました。これは非常に大掛かりなもので、研修を受けたボランティアなどが生後4ヶ月までの赤ちゃんのいるすべての家庭を訪問し、出産祝い品を届けて、体調はどうか、赤ちゃんは元気ですか、これをご縁に困ることがあればいつでも声を掛けてくださいというように、親が追い詰められることを未然に防ごうとするものです。いざという時に気軽に相談できるように、常日頃から顔の見える関係を築くことがこの事業の狙いです。いずれにしても、昔はこうした行政のサービスによらずとも、自然発生的におせっかいおじさん、おせっかいおばさんがいて、親が追い詰められるのを防いでくれていたわけです。ところが最近では、行政がこういう事業を

行わなければならない時代にきていると思います。

最後に強調しますが、「子育ての社会化」です。つまり、親の子育てを社会がバックアップするという事です。これは言い換えれば、社会の責任で一人一人の子どもを育てていくということです。親には子どもを健やかに育てる責任があります。これは当然ですが、それと同等に、社会が一体となって親が追い詰められないように、親の子育てを支援することがとても大事です。お年寄りの介護についても、昔は息子・娘が親の介護をするのが当然でした。こうしたことにはあまり社会がタッチすべきでないと言われていましたが、これにかんしても公的介護保険が導入されるなど、ほぼ社会化が図られています。ところが、子育てについてはまだまだ親の責任であるという考え方が根強く残っています。これからはもっともっと親が子育てをしやすいように、社会がサポートしていくことが必要であり、それを当然のこととして受け止める世論の形成が大事であると思います。

ちなみに、社会保障給付金についてですが、これはここ30年間で9倍になっています。例えば、ちょっとデータは古いですが、2004年では社会保障全体で90兆円です。これは30年前の9倍、つまり1974年には10兆円ですから、年々伸びています。その中で社会福祉費が15%です。福祉、年金、医療をあわせた中で、福祉関係の割合は社会保障給付費全体のわずか15%しかありません。特に、児童福祉関係はわずか3.6%にすぎず、しかも30年前の額とほとんど変わっていません。これは、いかに子ども家庭福祉の予算が低く抑えられてきたかを示しています。これからは少子化でどんどん子どもが減っていきます。しかし、今申し上げたように、きちんと家庭で子どもを育てられない、または歪んだ環境の中で育つ子どもが増えています。ということは、子どもは次代の担い手であるにもかかわらず、その数が少なくなっていくことに加えて、歪んだ育ち方する子どもたちが増えていくということになります。このような状況が続くと、我が国の将来はどうなっていくのか、非常に暗澹たる気持ちにならざるを得ません。ですから、子どもの社会化を議論していかねばならないし、社会的コストをもっともっと投入しなければならぬと思います。

松本 具体的なデータについて、今日の子育ての状況をご説明頂き、最後には子どもを育てることを、世の中がどのように問題として受け止めていくのかという点で、大変貴重なお話を頂きました。では、最後に本学の安岡先生のご報告をいただきます。

■「家族における人間の再生」

札幌学院大学人文学部教授 安岡 譽

皆さん、こんにちは。30周年ということで、身内ではありますが、大変喜ばしく思っております。私はここに奉職して5年足らずですから、まだ駆け出しでございます。30年の歴史をつくってこられた先人・先達・諸先輩に対して深く敬意を表します。



また、今日は、ご高名な先生方と一緒にお話できる機会を与えていただき、誠に有難く思っております。

与えられたテーマは大変難しく悩みました。家族、学校、地域の再生ということですが、何事も人間のやることでございますから、小集団であれ、大きな集団であれ、結局はその原点になるのは家族であると思います。学校も地域もそうでしょうし、さまざまな共同体や団体、宗教団体もそうでしょうが、すべての人間の集団は擬似的家族と言ってもよい特徴をもっています。したがって、家族というものを原点として考えていけば、話が分かりやすいのではないかと考えます。

1. 「再生」の意味（多義性）

そこでまず、再生という言葉ですが、広辞苑にも多様な意味が示されています。共通の意味をあげますと、「もともと存在していたものに価値を認めること、それが失われているのをそれを再びとりもどすか、よみがえらせること、そして再びその価値を機能させること」ということとなります。

2. 家族の構造と機能、その変遷と危機

1) 家族（家庭）の発生論

そこで家族の問題ですが、そもそも家族はどのように発生したのか、何故に今日まで存続してきたのか、という問題があります。私は家族学の専門家ではありませんので、詳細はわかりませんが、私が考えていることを述べさせていただきます。

そもそも、人間が動物と本質的に異なるところは、精神の形成とその成長にあります。その精神、つまり自我とか自分とか呼ばれる精神（心）は、一朝一夕にできるものではありません。それを為し遂げる場が家族であり家庭であると思います。自我を成長させ、適切に機能させること、その役割が家族にあるのです。言い換えれば、人間が「自我」という精神装置を発展させるうえで、自我を形成し、かつ、自我を防衛するための「安全装置」として家族が重要な役

割を果たしてきたのです。このことが必要な理由は、人間の成長、発達の特徴にあります。つまり、人間は生後何年かは、親または親の役割を果たす人物を必要とすることや、周囲の環境や対社会から保護されたかたちで養育されねばならないからです。したがって、ひとりの人間が安全に保護され、心身が成長する場としての家族なり家庭というものの存在が必要なのです。この意味で、人類が存在する限り、家族、家庭という存在は決して消滅することがない、永遠のものと考えられます。

2) 家族、家庭の役割と機能

さて、家族・家庭の役割と機能には多くのものがありますが、私が重要と考えるのは、①親子関係を中心に、各自が成長・保護・養育される安全な環境としての機能、②家族の血縁関係を中心とした凝集性（まとまり）、連帯性（連帯感）、帰属・所属意識（所属感）、その家系に代々続く歴史的意識、など、それらを維持する機能、③「子どもが自分の家族に同一化し、自分の家族への依存に安心感をもち、新しい人間関係を形成してゆくことができるのは、ひとえに父母に対するエディプス・コンプレックス状況を克服することによってである。」(T. Lidz. 『家族と人間の順応』[1963])、というように、親子間の愛憎の心理的葛藤を経験しそれを克服し、人間としての成長させる機能、であります。

ひとつ注目しなければならないのは、②の問題です。つまり、血縁関係を中心とした凝集性（まとまり）、何はともあれ家族としてまとまっていること、そこには連帯性も生まれるでしょうし、自分はこのうちの子だという所属、帰属意識がでできます。自分には両親がいて、その親にも両親がいて、というふうに、連綿と続いてきている家系への歴史的認識も生まれるわけです。

私たちは短い一生で死を迎えますが、「血」というものが、個々の死はあっても、永遠に伝わっていくという構造になっています。生物学では、それはDNAと表現されるものでしょう。昔は、DNAの代わりに、神様・仏様という概念で永遠性を感じ、そこで安心しようとする人間の心の営みがあったのでしょうが、今の言葉で置き換えれば、DNAということになりましょうか。

いずれにしましても、ひとりひとりが自分の存在というものを、長い歴史の中の、一経過として存在しているという、自分の位置づけを感じとることができることが、いわゆる同一性とかアイデンティティとよばれるものではないかと私は思います。したがって、人がそのアイデンティティをどこまで感じきれるかが問題です。何か自分は浮き草のような、居場所がないような感覚でおられる人もいるでしょうし、自分が何をやってよいか、どうしたらよいか分からないと自覚している人もいるでしょうが、いずれにしろ要は、歴史性、連続性の意識が希薄であることの表れではないかと思われます。

③に関連して、家族・家庭がなぜ必要かと言いますと、親と子との関係で愛情をめぐる葛藤、憎しみをめぐる葛藤、つまり愛と憎しみの心理的ドラマを私たちは家族・家庭の中で、小さい

頃から、くりひろげ、体験するわけです。そういう体験の中から、人間というもの、心のありようを学んでいるのです。その場が家族・家庭というわけです。そうして学ぶことによって初めて、他の人との人間関係もできてくるわけです。

現在、問題となっているのは、そうした家族・家庭の役割や機能が十分に果たされず、危機におちいつているということなのです。今、家族・家庭が危機だということは、養育の場、人間が学ぶ場、葛藤を体験してそれを解決する場、そうした家族・家庭という土台そのものが、グラグラし、崩れてきている現象がおきていることなのです。そこで私たちは、もう一度、家族・家庭の価値を再認識し、必要な部分を再生させることが大切なのではないか、というわけがあります。

3. いくつかのエピソードから 一 家族の悲劇

1) 地下鉄での出来事

先日、私用があって、地下鉄のホームで電車を待っていたときのことで。20代後半の若い母親が手に雑誌を持ち、ひとりの5、6歳の男の子と電車から降りてきました。男の子はワッーと泣いています。母親は突然たちどまって、大きな怒鳴り声を発しました。「何で泣いているの!!泣くのを止めなさい!!」と叫びます。周囲には電車を待っている多くの人々がいて、皆さんははっと注目するわけです。「あんたがそうだから、私は本も読めないじゃないの!!」。どうやら雑誌を読んでいた母親が男の子が何かをねだり、それがいられないので泣いているらしい。しかし、母親は自分が読書を妨害されたことにもすごく腹を立てておられるらしい。そういう光景、状況です。子どもは母親にすがるように泣き続けます。そのお母さんは、「私のはあんたの思う通りにはならないの!」、そして、「あんたがしっかりしないからいけないの!泣くのは止めなさい!!」と怒鳴り続けます。そして、とうとう、「泣くなら、もう知らない!」と男の子を突き放し、さっさと階段をかけあがっていく、その後を子どもはまたワッーと泣いて母親を追いかける。ほんの、1、2分の出来事でしたが、何か後味の悪い、物悲しい光景でした。

ふつうのお母さんなら、その子を何とかなだめたり、あるいは周囲に配慮して大きな声を出さず、対応すると思います。しかし、その母親は周囲にあたかも誰もいず、ただ2人だけしか存在しないかのごとくに振舞っています。そういう言動ですね。周囲も見えず子どもの心も見えない。子どもの心が見えないのですから、お母さん自身の、自分の心のありようも見えていないのでしょね。

このとき、私の頭に浮かんだ連想は次のようなことでした。このお母さんは小さい頃、同じようなことを自分の母親からされた経験があるのではなからうか。かりにそうだとすると、そのお母さんは、かつて自分の母親と同じことを再演しているのであり、叱られている子どもは、かつての自分の子ども時代の姿なのだろう、そう考えると、そのお母さんは、子どもに自分の過去の姿を重ねて益々腹が立ってきているのだろう。そう考えると、このお母さんはかわいそ

うな、悲しい人であろう。そして、この子どもも悲しい状況におかれている。いずれにしても、2人とも不幸で悲劇的であろう。このように思ったわけで、私は何かいたたまれないような気持ちにさせられたわけです。

2) テレビでの出来事

地下鉄の出来事の2, 3日後に、これも偶々テレビを見ていますと、ある有名な小児科医と作家の澤地久枝さんが対談をしていました。その中で、澤地さん自身の体験として、似たようなエピソードを語っておられたのです。ある病院の待合室の出来事ですが、風邪をひいていたのか薬を処方された子どもがいて、その子が薬をのみたがらずぐずっている。その子どもに対して、ヤンキー風の若い母親が、コップに薬を入れて「飲みなさい!!」と怒鳴り続けているという光景です。その場にいた澤地さんがたまたまに、「あなたの叱り方はおかしい」と言ったわけです。

昔ならば、そうした介入は、どこでもよくみられるものでした。私の幼い頃は、悪いことをすると、近所の知らないオジさんやオバさんから怒られたりしたものです。今の都会ではそういう場面はめったにみられなくなっております。澤地さんは、それをやったわけですね。その意味では勇気ある行為です。私はそこまでやらないかも知れないですね。

ところが、その若い母親は逆ギレして、「おばさんが何で文句を言う権利があるのか」と言ったそうであります。それで澤地さんが驚いた、と話されていたわけです。

こうしたエピソードから、皆さんはいろいろなことを連想されるのではないかと思います。私は、この若いお母さんたちは、不適切な行動をとるにはとるだけの理由があって、それぞれがそれなりの悲劇を背負っているのではないかと、思うわけです。そこを理解しておかなければならないと思う一方で、そもそも彼女たちは母親になる準備が十分にできていたのであろうかという疑問がわいてきたのです。先程、子育て支援の問題等についてのお話がありましたが、実際には事が生じてからいろいろ支援するのは難しいことが多いかと思います。そうなる以前に、先手をとって、事が起こらない前に予防できないか、そうするのが最善ではないかと私は常日頃、強く感じております。たとえば、小学校、中学校、高校でもよろしいのですが、家庭をつくることや親になるということはどういうことか、その準備をするのに何が必要か、心の準備するにはどうしたらよいか等という点について、学校教育はなぜ教えないのでしょうか。そんな考えも浮かんできたのです。

3) 臨床での出来事

私は精神科医でもありますから、いろいろな患者さんを診ております。

ある日、10歳のA子さんが、両親に連れられて私の外来を受診したことがありました。主訴は、「足が立たない」、「話そうとしても言葉が出ない」、「意識を失い、周囲の問いかけに反応しない」、ということで、いわゆるヒステリー症状と言われるものです。1週間前から、そうした症状が1日に1回はおきるといいます。それで両親が心配して連れてこられたわけですが、

家族の説明によると、次のような経過です。

初診の1ヶ月前から、A子さんはどことなく元気がなくなり、学校を休み始めました。不登校のきっかけは、両親の間に長年にわたる不仲と対立があり、離婚問題がもちあがったことでした。その事を両親がA子さんに伝えた直後に、A子さんは急に手足をばたつかせながら1時間ほど泣きじゃくったそうです。そして、翌日から、主訴の失立・失歩・失声、「意識喪失」などのヒステリー症状が連日みられるようになったわけです。

ところで、両親の不仲はすでに10年以上も前から始まっていて、軽度の身体障害をもち万事がスローモーションで機転のきかぬ母親に対して、短気な性格の父親が何かにつけて罵詈雑言をはき、あまつさえ身体的暴力をふるうため、母親はしだいに離婚の意思を固めていったとのこと。そして、実際に家庭裁判所へ離婚調停を申し込もうとした矢先に、A子さんが発症したわけです。

この離婚問題の渦中で、A子さんは非常に戸惑い悩んだようです。それは、両親がそれぞれ自分たちの方がA子さんをひきとると主張したからです。これについてA子さんが私に語ってくれたことは、「お父さんのところに行くか、お母さんのところに行くか、迷っている。自分で決められない。お父さんのところに行けば、お母さんは悲しそうな顔をするし、お母さんのところに行けば、お父さんが悲しそうな顔をする。可哀相です。ほんとうは、3人で暮らしたい。お父さんもお母さんも、お互いに悪口を言わないでほしい。それが一番悲しい」ということでした。

このA子さんの治療は、ご本人の気持をよく聴いてあげることで、短期間で症状は消失しました。この子が病気になったということは、幸せな両親であってくれという切なる願いが反映されています。子どもは健気なものです。そうした子の心を、親は気づかない。“子の心、親知らず”です。昔は、“親の心、子知らず”で、親不孝が問題になったものですが、最近では、「子不幸の親」が問題のようです。そういうこともありまして、私は、両親に介入したわけです。「子どもを産んだのなら、親としてきちんと責任をもって育てなさい。私たちの経験では、両親が離婚したり不仲であるのは、小さな子どもにとってとても悪い影響を与えることをよく知っています。どうしても、相性が悪く、離婚せざるを得ないのなら、せめて子どもが20歳過ぎてからにしてください」と忠告いたしました。この両親は、結局、離婚を撤回したわけです。

さて、いくつかのささやかな事象をあげてきましたが、そうした事象の背景には、現代の家族・家庭の問題があることは言うまでもありません。

4. 現代の家族・家庭の諸問題

私は、平成8年(1996)の日本思春期青年期精神医学会で、「思春期青年期における家族の諸問題」と題して報告したことがあります。その中で私が論じたことは、昭和20年以降の、いわゆる戦後の社会の激しい変化に伴う家族の変化についてでした。

1) 高度産業社会への変貌と家族の変化

ご存知のように、昭和30年代から開始された高度成長政策で、工業化、大量生産と流通革命により高度産業社会へとわが国は変貌しました。それに併行して、都市化と核家族化（大家族から小家族へ、夫婦家族化、少子化など）が進行しました。消費欲求がかきたてられ、快楽主義、利己主義などの個人主義的思想の促進がみられるようになり、さらに、金銭至上主義、効率万能主義、競争意識といった時代精神が高度経済成長の影の面として、家族関係の希薄化、分断化をもたらし、家族としての連帯感や帰属意識を消失させていったという変化をもたらしたのです。

しかし、今日では、事態はより深刻な様相をおびてきているのです。ひとつは、家族集団の解体现象の進行です。離婚、貧困、差別、家出などで、家族が解体してしまうことです。ふたつめは、家族崩壊現象の進行です。自殺、麻薬やアルコール依存、ギャンブル狂、窃盗、傷害、非行などにより、家族そのものが崩壊していくことです。

多くの一般の家族・家庭ではまだ普通だと思いますが、どの家族でもいつ起しても不思議ではありません。その可能性があるわけです。そして、これらは、先に述べたように、人が成長したり発展する場としての家族・家庭そのものを失わせる危機をもたらすのです。

2) 家族・家庭の危機

そうした家族・家庭の変化や危機をもたらした事情は次のことであろうと思います。

第1に、伝統的な家族制度、旧来の価値観、家族観が大きく崩れ去ったことでもあります。従来は、家とか家庭とか、家族といえば、その血縁関係のもとに、少なくとも連帯感や安住感を得られる場として期待されるものでありました。外で何があっても、家に帰るとホッとするということですね。ところが、今日では、どちらかという、かえって緊張や対立の場になりやすくなっていることがあります。それは、個々人が、自己実現をめざす場になり、自己主張し、対立や競争の場となりやすくなっているのです。

そうしたことから、家、家庭、家族がどうもまずい状態になっているのではないかと考えられているのです。このことをすでに明治時代に予見していた人がいます。

そこで第2に指摘せねばならぬことは、「家」の自殺という問題です。すでに明治39年（今から102年前）に、民俗学者の柳田国男が『田舎対都会の問題』という論文で「家の自殺（ドミシード）」について論じております。つまり、わが国ではすでに明治の後半から工業化が進行し、田舎から都会への人口流出が生じ、「家」のあり方を急速に変えていった現象が記載されています。文章を意識して、わかりやすく述べますと、「都会に人が住むようになると、先祖子孫という思想、つまり、ご先祖さまとか、子や孫だ、ということへの関心が弱くなって、家というものの存在を軽視することがおきるようになっていく。それは、個々人の意志や考えばかりが強く優先されるようになって、家の生活というものが無視されるようになるからだ」というわけです。これを「家の自殺」と名づけたのです。

それから90年後の平成8年（今から12年前）に加藤秀俊は中央公論に『出家と脱家—餓鬼の時代』を書きました。それによれば、「最近の10年間（昭和62年から平成8年まで）に、日本全国の家庭から急速に仏壇や神棚が消失している」事実を指摘しています。「祖先」を「祭祀」するイデオロギーや習慣が消滅しつつあることを表し、「家」そのものが断絶したり、「死につつつある」現代を「餓鬼の時代」として論じたのです。餓鬼というのは、無縁仏で、死んだ後も祀られない人を餓鬼といいます。少子化で家が断絶したり、誰もお参りしない墓が段々と増えています。こうして、家が消滅していくということは意外に重大なことだと思います。

以上のことがらが象徴することは、①かつて「家」を中心とする家族の凝集性、連帯性、所属・帰属性、世代伝達的な歴史性が希薄化し、消失しつつさえあるという事実、です。さらに、私が最も重大だと考えますことは、繰り返しになりますが、②そもそも親子間の心理的葛藤、愛情や憎悪をめぐる葛藤（すなわち、エディプス葛藤）を解決すべき場としての家族や家庭、家という土俵、土台そのものが崩れてきていること、です。

上述のような、家族のメンバーの人間関係の希薄化は、個々が家庭以外の場（宗教団体や、その他の集団）に人間関係の結びつきを求める行動に駆り立てますが、そこでも救われずにいる人も多いのです。

こう考えてきますと、現代の若い人たち、特に若い親たちは、そうした人間関係の希薄化の中で育ち、親になっていると考えられます。そうした親たちに育てられる子どもたちが将来どうなるかは推して知るべしでありましょう。

私がこれまで述べたような事実を強く確信するようになりましたのは、長年にわたる思春期青年期の患者さんたちの臨床経験を通してなのです。つまり、若い患者さんたちは、自分の親のことをよく知らない、親の来歴をよく知らないのです。また、その親自身も自分の親についてよく知らないという事実が多く出くわしたのです。私は非常に驚いたわけであります。これでは、若者たちにとって自分の人生の位置づけや、自己の確認、自己の同一性を発見できにくい筈であると考えたのです。これでは、親子間の対話といっても、真の相互理解が成り立たない筈であります。結局のところ、若者たちの自己確立や同一性確立もできにくいであろうと思いました。

繰り返しますが、若い患者さんに親のことを聞いても、親がどのような人生観をもち、どのような人生を歩んできたのか、どういういきさつで結婚したのか、ほとんど知らないのです。そういうことをしみじみと語りあえる機会が少ないのかも知れません。その若者の親自身もそうですから、尚更でしょう。

そこで私は、そうした思春期の患者さんを診療する場合に、必ず親のことを聞きます。親にはその親のことを聞くことにしています。その中で、親が子に期待すること、子が親に期待することなど、そしてその理由などをお尋ねします。それをきっかけに、本当の意味での親子の対話が成立していくことになります。それが、患者の治療に大いに役立つこともわかってまい

りました。

ここで症例をあげます。北海道に移住し、4世代目にあたるある若者が、対人緊張の症状でやってきました。北海道には曾祖父が入植し、一旗あげて内地に戻りたかったようですが、それを果たせず、祖父の代で祖父は医師になりました。その祖父の急逝で、父親は医師の道を絶たれたため、息子である患者に医師になることを期待し、そのプレッシャーでこの患者は悩んできたという経緯でした。この家系をみますと、内地で産を失い、共同体から脱落してきた窮民であったのでしょうか。新たな北の大地で、産を成そうとする野心と、食べられるだけで十分とする現状肯定との間を曾祖父はゆれ動き、それを引継いだ祖父が医師になることで、曾祖父の一定の願望を満たすが、その祖父を引継ごうとした父親が自分の果たせなかった部分を、自分の息子に託す、という、世代間の伝達が存在することが明らかになりました。そういう理解を父親と患者が共有することになりました。患者は結局のところ、症状は消失し、父親の期待を取り入れ、医師になりました。この患者が私に語ってくれたことですが、父親が自分の父親との関係を思い出し、息子である患者に自分のできなかつたことを期待していたことを語ったとき、この患者は、自分の存在が家系の流れ、歴史の流れの中にあるという感覚を感じたこと、それにも増して自分の親との関係を開示する父親の姿に、何ともいえぬ“温かいもの”（本人の別の表現では“愛情のようなもの”）を感じたということでした。

以来、私は、この“心が温かくなる”という体験は、どんな意味をもつのかを考えさせられるようになりました。これについては、最後に、またふれることにします。

3) 家族・家庭の危機とその対策

私の臨床経験から、家族・家庭の危機に対して、現在のところ私なりの対策は、次の2点を考えています。

ひとつは、再三述べていますが、家族がもっている世代間の伝達や継承の機能を回復させること、再生させることではないかと思えます。とくに、先に述べたような歴史的意識の回復です。私が20代の頃、一時、「ルーツを探る」ことが流行りました。自分の先祖を明らかにすることです。最近では、澤地さんが「家族歴史地図」を提唱されていて、私と似たような考えをもたれているなと思いました。

もうひとつは、家族がもっているエディプス葛藤を解決する場としての家庭の機能を回復させることです。この場合、一言でいえば、「親が親たりえないと、子は子たりえない」ということでしょうか。親の側の課題としては、先にふれた親になること自体への準備とその支援が必要だということです。そういう基礎があつてこそ「子育て支援」も有効さを増すことが期待されます。

5. おわりに 一人間存在の本質

いろいろ述べてきましたが、家族・家庭の再生は、基本的には人間そのものの「再生」にあります。今日は人文学部の講演なので、文学的にまとめたいと思います。

中島敦の『わが西遊記』は皆さんご存知ですね。そのひとつに『悟浄歎異』があります。三蔵法師が弟子を3人連れて天竺へ旅をする話です。弟子のひとり悟浄が、満天の星を見上げながら、つぶやく場面が最後にあります。

「流れ星が尾を曳いて、消える。何故か知らないが、其の時、不図俺は、三蔵法師の澄んだ寂しげな眼を思い出した。常に遠くを見詰めているような、何物かに対する憫みを何時も湛えているような眼である。それが何に対する憫みなのか、平生は一向に見当がつかないでいたが、今、ひょいと、判ったような気がした。師父は何時も永遠を見ておられる。それから、その永遠と対比された地上のなべてのものの運命をもはっきりと見ておられる。何時かは来る滅亡の前に、それでも可憐に花開こうとする叡智と愛情や、そうした数々の善きものの上に、師父は絶えず、凝乎と慥れみの眼差しを注いでおられるのではなからうか。星を見ていると、何だかそんな気がしてきた。俺は起上って、隣に寝ておられる師父の顔を覗き込む。暫く其の安らかな寝顔を見、静かな寝息を聞いている中に、俺は、心の奥に何かポツと点火されたようなほの温かさを感じてきた。」

さて、私はいつも申していますが、人間とは矛盾する存在である、と思います。生が与えられているのに、死が約束されている。矛盾です。愛があって思いやりの心の働きがある反面、憎しみや破壊するような心の働きも同時にもっています。矛盾です。その矛盾をかかえ、悩みながら、良かれ悪しかれ、一生懸命に生きているのが人間です。一時期のはかない生命の輝きに、慥れみの眼差しをそそげる師父の存在、そして、そうした眼差しを自分自身にもてるようになることが大切なのではないのでしょうか。そうした眼差しが存在し、心に温かさを感じることができる限り、自分の中にも他人の中にも、それを感じることができる限り、人間には人類には永遠の未来があるのでしょうか。人間存在の矛盾と、どう折り合いをつけていくかが課題で、できるだけ折り合いをつけていかなければならないと思いますが、矛盾した存在であることを素直に認める人間でありたいと思います。人間の再生とはそうした気づきを誰もが持つことである、と思っております。

最後に、午前中の記念講演（石弘之氏の「地球と人類の未来」）を聴きましたが、人類の未来に関しては、私は悲観もせず、楽観もしないという、その中間にいつも身をおきたいと思えます。それは意外と難しいことなのですが、それでもその道を進むのが大切な時代であろうと思えます。ご静聴、有難うございました。

松本 有難うございました。家族の行いから入られ、最後は人間存在そのもの、人間というものについてどう考えるかというお話でした。三人のパネラーの方々にご報告をいただいたところで、これから10分の休憩に入りたいと思います。

(10分間の休憩)



松本 では再開いたします。フロアからも活発なご意見をいただきたいと思います。その前に、お三方からそれぞれ補足、あるいは他のお二方へのご質問等、少しずつお話しいただきたいと思います。

村瀬 特に補足する点はございません。

才村 先程、子育て家庭が置かれている状況についてお話しましたが、もうひとつ考えておく必要があるのは、親の子どもに対する養育の仕方を考えるときに、今の親がどういう時代背景の中で生まれ、育ってきたのかということです。しかし、時間の制約があって、この問題はアドリブでは話しにくく、私の書いた別の文章（才村純 [2007年]「家庭で今、何が起きているか～きびしさを増す子育て事情」、社会福祉法人恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所編『日本子ども資料年鑑2007』KTC出版、p.22-23より）を読む方が分かりやすいと思いますので、読み上げます。

今の親が育った時代背景ですが、今の若い親たちは団塊ジュニアと言われる団塊の世代が生き育てた子どもたちです。団塊の世代は、終戦によって、それまでの、例えば富国強兵が学校教育の基盤となっていた全体主義的な思想が根底から覆り、民主主義、個人主義、権利の尊重といった新しい価値観のもとで育った人たちです。しかし、これら新たな思想はにわかには欧米

から直輸入されたもので、例えば自由というのは気まま、平等とは個性の排除、個人主義は利己主義、権利は義務の放棄というように、十分に咀嚼されることなく、本来の意味をはき違えたままに、戦前・戦中時代の反動として人々の生活に浸透してしまったのではないか。さらに、産業化に伴う合理主義の追求は、不合理なもの、実利を生み出さないものをことごとく否定し、生産性に寄与するステレオタイプな人材が期待され、過激な競争を招来した。さらに個性無視の風潮をもたらした。また、高度経済成長下にあって、国民がこぞって物質的な豊かさの追求に終始し、人と人との触れ合いや、弱いものをいたわるといったことを結果的に排除した。このように、団塊の世代は誤った生活理念、学歴主義、物質的な豊かさの追求といった価値観の中で生まれ育ってきた人たちであり、団塊ジュニアはこういった人たちに育てられてきた人たちである。つまり、今の若い親たちは、しつけや教育の枠組みとなる確たる価値観を持たないまま勉強に終始し、生活判断の乏しい親のもとで育ってきたのではないか。しかし、1973年のオイルショックや1990年代のバブル経済の崩壊などによって大企業が次々と倒産する中で、一生懸命勉強して一流大学に入り、一流会社に就職すれば安泰だといった幻想は打ち砕かれ、さらに一流企業と言われている会社が次々と不祥事を引き起こしている現実を目にして、団塊ジュニアは将来への夢を持ってなくなっている。さらに、インターネット、メール、ゲームといった実体験を踏まないバーチャルな世界に浸ってきた結果、努力や工夫を重ねた末の達成感を経験することなく、ボタン1つで何でもできるといった短絡的な万能感を抱いていて、努力、誠実といった言葉は今や死語と化しつつある。最近社会を騒がせたマネーゲームに関わる一連の企業不祥事を取り上げるまでもなく、お金さえあれば怖いものはないとの拝金主義が横行していることは周知の事実である。このような親に育てられる子どもがどのような人間になるかは、想像に難くない。弱いものに対する執拗ないじめ、ホームレスなどの社会的弱者に対する情け容赦のない暴力などの仁義なき所業も、心を失った現代人のありようを映し出しているのではないだろうか。私の補足は以上です。

安岡 特に補足はありませんが、皆さんのお話を聴けて爽やかな気分です。特に村瀬先生のお話は、お人柄が出ていてしみじみとした感じがしましたし、才村先生のお話は、難しい課題に対して多面的に悪戦苦闘している感じがして、そのご努力に敬服しました。

松本 それでは早速、フロアの方からご発言を頂きます。

伊藤 本学の伊藤則博です。本日はどうも有り難うございます。つい最近、札幌で小学校3年生の女の子が、不登校のまま19歳までずっと母親と二人、歩くこともできない状態で発見されました。母親は精神疾患であるということで、お子さんをこういう状態にしてしまった背景には、いろいろな要因があると思います。札幌市の対応が問題視され、対策委員会を作って、近

隣の地域、学校の問題の検討に入りました。こうしたことにならないためにはどうしたらよいか、ご意見を伺いたと思います。

才村 ちょうど1週間前でしょうか、今ご指摘の問題は全国的に大きなニュースとして取り上げられました。だいたい虐待が絡んでいるケースは、ひとつの家庭でいろいろな問題を同時に抱えていますので、このケースもご他聞に洩れずそうだろうと思います。したがって、虐待の問題に介入していくには、ひとつの機関がいくら頑張っても限界があります。そういうなかで、このケースも学校が関わり、福祉事務所が関わり、児童相談所に情報が入ったとか入らなかったとか言われていますが、本来であれば児童相談所にも情報が当然寄せられるべきですし、児童相談所もこれに関わるべきです。母親も精神的疾患がありますから、保健医療機関も関わるべきです。ただし、当時の時代背景からすると止むを得ない面があったかもしれません。今ではどこかの機関がこういう情報をキャッチすると、直ちに関係機関が集まって、今現に関わっている機関、また今後関わってもらった方がいい機関に声かけをして、全員が集まって情報を共有し、今後この事例に対してどう関わっていくかを考えます。そこで作戦を練り、援助の実行段階においても、お互い報告、連絡、相談をしながら関わっていきます。このような問題にたいしては最近では取り組みが進んでいると思いますが、当時はそうしたシステムがまだできておりませんでしたので、少々止むを得ないところがあったかと思います。どうすればこうしたケースを防げるかという、今申し上げたように、情報がひとつのところに集約され、関係諸機関が情報と取り組みを皆で共有していくというネットワークづくりがきわめて大事です。

発言者 大変素晴らしいお話をいただき、有難うございます。どのテーマも大変難しいと思います。その中で、私は身の回りに起きていることを申し上げ、先生方にご助言をいただけたらと思います。今の世の中を見ると、年代ごとに断層があり、縦の人間関係がほとんどなく交流がなされない。会社にしても、地域のいろいろな団体にしても、横の広がりだけでしっかり意見交換され、スクラムを組み、その枠からはみ出ないという印象が非常に強い。これは、三人の先生方が言われた様々なことに通じることだと思います。団塊世代、そして団塊世代の子どもたち、会社で働いている人も含め、いろいろな年齢層がすべて一緒になって何かをやる状況ができないか。昔は学校を核として地域社会が存在しました。地域での交流ができないかと、非常に強く思います。安岡先生が言われましたが、電車の吊革にぶら下がって、鉄棒の車輪のようなことをしている。両側にびっしり大人が座っていても、誰も注意しない。私が勇気をふるって「危ないよ、落ちたら大変なことになる。周りの人より、あなたの命が大事だよ」と言いました。周りの大人は何をしているんだという印象を持ちました。携帯電話が鳴っているので、「携帯は止めましょう」と大きな声で言いました。皆が指差したのは、私の隣の人でした。「携帯、鳴ってるじゃないですか」と言いましたら、イヤホンで音楽を聴いていて呼び出し音

が聞こえなかった。そこで「何をやってる」と言ったら大変なことになるので、状況を判断するのが大事だと思いました。

もう一つ、恥ずかしい話ですが、私の住んでいる目の前に小学校4年生くらいの男の子がいます。昼間、出てきて何をするのかと思ったら、外で立小便をするのです。そしてまた家に入ります。母親にそれを言ったら、「そんなことを、あなたに言われる筋合いはない」と言われました。また、外で焼肉をやっている、そこに小学生くらいの男の子が2人おり、親もいるのにタバコを吸っているのです。あれやこれや色々あるわけですが、一歩前進できるような方策がないのか、何かアドバイスをいただきたいと思います。

松本 地域社会でのつながりを、世代を超えて持つためにはどうすればいいかということで、具体的なお話をいただきました。どのようにお聴きになりましたか。

村瀬 ただいまのお話で、大変なご苦労とお心遣いをされていることが、ひしひしと伝わってきました。見て見ぬふりをされないことに心から敬意を表します。ただ、今のような壮絶な例というのは、私、生活していてあまり経験がありません。ひとつには、非常に抽象的に申しませんが、今の話では、ウォークマンや携帯をいつも聴いていて、周りに対して注意を払いながら自分が今この空間にどう存在したらいいかという問いを持たずに暮らしている状況が色濃く浮かび上がっていると思います。本当は家庭の中でも時と場を選ぶという姿勢がいますが、そういう姿勢がなくなりつつあります。もうひとつは、私たちにはあまりにもいろいろな情報が小さいときから溢れているので、本物と偽物とを見分ける眼力がなくなり、何か人間が非常に鈍感になり、人やものに気づかなくなっています。よい出会いの機会が多いことが望めます。

普段は暴力をふるって周りから迷惑視されているある中学生の男の子が、マチスの絵の前に行って、「村おばさん、変だねえ。この絵は下手だよ。だけど何か引き込まれるものがある。俺の絵とほとんど変わらない。でも、俺の絵をここに貼っても多分誰も引き込まれないと思う。これは何なの」と言いました。これはすごいことだと思います。例えば、東山魁夷さんの展覧会に子どもたちを連れていくと、皆は最初は「嫌だなあ」と言いますが、立錐の余地がないほど人がたくさん立っていて時間が制限されるような中でも、子どもたちが一生懸命絵に見入っていると、そのうち「これを見るとすっきりするよ」と言う子が出てきます。そういう例は枚挙にいとまがないくらいです。やはり誰の意識の中にも、良きもの、美しきものを見たい、人と折り合って生きたいという心があります。東山魁夷さんの絵のように、人は良いものを見たときに、長く眠っていたものが引き出されます。こういう本物に出会う機会を配慮することと、他方では、命に関わるような危ないことにはノーと言う勇気がこれからは大事だと思います。

毎日の生活の中で、安直で手軽に入る刺激に埋没するのではなく、本物と接すること、本物

の前では襟を正すことを、小さいときから学ぶことがとても大事だと思います。

才村 地域全体のつながりを持つと思えば、例えば地域に住んでいる人たちが目的を共有しなければなりません。これは、ひとつの目標に向かって、そこで心が結ばれるということです。そういう意味で、モンスターペアレントも含めて、親子が地域行事に積極的に参加できるように、地域の人たちが常に意識して対応していくことがすごく大事であると思います。ただ、今の学校教育では、勉強ができる子は学校で承認されますが、勉強できない子はことごとく切り捨てられるような風潮があります。勉強ができない子は学校では本当に行き場所がないわけで、そういう子どもでも、例えば地域で祭りなどがあれば、これを一緒にやろうというかたちをとれば、その子どもも目標ができるし、気持ちも明るくなります。うまくいけば、成功体験も味わえるし、それが自信につながっていくわけです。そういう積み重ねを通じて、地域全体がつながり、世代間ギャップを埋めることもできるかと思います。何か目標を共有するということがすごく大事であると思います。

安岡 うちの近くに15・16歳の子がいて、毎日のように家を飛び出してきては、車を停めます。雨の日でもやっています。最初私はびっくりしましたが、何日か観察するうちに、本人なりにニコニコしていますから、何か楽しい行為なのでしょう。そのうち何回か続くと、タクシーの人や車の人が手を挙げていたりする。つまり、何か理解できるようつながりができるのでしょう。私は精神科医ですから、傷害の恐れがある場合は、押さえたり掴まえたりします。私の同級生の精神科医も、暴れている患者がいるということになると、いざという時のために看護師や男性を数人連れていきます。私は1回もそういうことはしたことがないが、それぐらいの覚悟があって、自傷他害の恐れがあるときは介入しないとなりません。患者さんでない場合も、喧嘩などしていると介入して、結果は常に私が殴られるという結末になり、自傷他害の恐れがあるのは私自身になったりします。どちらに非があるのかを解明するという、だんだん知恵がついてそういうこともやっております。様子が分かれば、介入の仕方もあります。ちょっと楽観主義かもしれませんが。もちろん質が違うもの、暴力沙汰が起こるようなちょっと次元の違う部分というのは、我々が解決しようという危険を犯すことはないというのが合理的なことです。それは警察に任せる。最近警察の方も、面倒くさいとハナから出てこないこともあります。

電車の中で危険な行動をしているとか、携帯電話も問題もご指摘いただきましたが、気になりますね。傷害の恐れがあるという観点で、介入するかしないかというのは少しずるいかも知れませんが。根本的にはマナーの問題だろうと思います。マナーを守る人を一人一人増やしていく以外ないのではないのでしょうか。多数派がそうしていると、自分もそうせざるを得ないという部分に落ち着くという考え方をしています。

藤野 本学の藤野友紀です。貴重なお話を有難うございました。精神的にも経済的にもすごく変化の激しい現代に私たちは生きてると改めて感じ、大変だと思うと同時に、そういう時代に生まれたのも何かの機会と捉えた方がいいと思いながら、お話を伺っていました。質問ではなく意見なのですが、子育て支援や虐待の問題を考えると、「昔は力があったけれど、何らかの時代の変化に伴い、包容力やしつけの力、常識などが低下してきた」という捉え方がよくなされますが、私は昔の時代に子育てとして求められていたものと、現代の親に求められているものが変わってきているのではないかと思います。

明治・大正・昭和初期の庶民の子育てを調査した報告書の中で、その時代の人たちは働くことで精一杯で、子どもの教育をするという感覚はほとんどなかったということが指摘されていました。それに対して、今の世の中は子どもの将来がどんな展開をするかわからない中で、親が子どもの全責任を持つことを求められる社会、時代だと考えられると思います。そうだとするならば、「問題のある親」への支援というときに、その人の個の問題というふうに考えるのではなく、目に見えないプレッシャーを皆が受けている時代において、「たまたま困っている状況にある人たち」と捉え、社会の仕組みを変革する視線こそを持たなければならないと思いました。今日のテーマが「家族・学校・地域の再生を考える」ということで、家族と同時に市民の再生ということがセットになっているのもそういうことなのかと解釈しながら、聴かせていただきました。有難うございます。

松本 子育てに関して言えば、もう少し子育ての負荷、子育ての基準の変化とセットで考え、そこから地域の問題をどう考えるかというご発言でした。パネラーの先生方、いかがでしょうか。

安岡 昔は村とか、ある集団が家庭でした。そう考えれば、その共同体が無言のうちに分担していたことがあります。そうした村や共同体がだんだん壊れていくし、個々の家庭に分散していった、個々の家庭が責任を持つといった感じになったのでしょうか。もう1つは、その共同体と言われるものは、昔我々がよく使っていた「ふるさと」というものです。つまり、現代人はふるさとを失っている。都会生活をする、ふるさとという概念が生まれにくく、ふるさとという感覚がない。共同体の中であれば、支えられたという意識が残っているのですが、それが崩れていくということなのでしょう。逆に、各家族という単位で考えすぎず、ちょっと広げれば、共同体でやっていけるというのがご指摘の通りであると感じました。

松本 そろそろお時間となりました。最後に、今日の感想も含めて、お三方から一言ずつご発言をお願いします。

村瀬 物事というのは、普遍的によく見ますと、決してマイナスのことばかりではありません。今人どうしのつながりが薄くなったと言われ、地域共同社会が弱体化していると言われてます。それは確かに問題を多く含んでいますが、しかし、かつての村のような生活、その濃密な人間関係が人間に本当にポジティブな面だけをもたらしたかという、必ずしもそうではありません。生きていく上の重さがありました。昔の村には実はいろいろな面があったということも併せて考え、何々は良かった、しかし何々はだめだという対立的な発想では、より上の未来が開けないのではないかと思います。問題行動の目立つ世代も、決してそれだけではなく、逆に切り替えの早い面があります。だから、彼らはあのようにスイッチオフしながらやり直していくのかなというくらいに捉えないと、世代間の違和感も消えないという気がします。

もうひとつ、最近『人間の品格』という本がベストセラーになっていますが、見ると、当り前のことが書いてあって、でもそれを敢えて言われないと、当り前のことが分からなくなるといことがありますね。やはり、むさぼり尽くすのではなく、どこか分かち合うということに自然な意味と喜びを感じるような、そういう精神文化を取り戻すことが必要ではないでしょうか。スイスなどで講演会をする時も、受付には箱が置いてあって、講演を聞いて帰る時に、気持ちに応じて募金をします。全部の講演会でそうだというわけではありませんが、今日の募金はどの団体に贈りますということが書いてあります。私はそれを見て、人と人が分かち合うことの意味を改めて考えさせられました。

才村 先程は大変貴重なご意見を伺いました。我が国の子育てのことをいろいろ調べてみると、今ほど親だけですべてこなしていかなければならない時代はなかったのです。われわれは日頃、子育てを一生懸命されているお母さん方と話し合うことが多いわけです。例えば、民生委員もそうですが、一生懸命サポートしようとされておられます。ところが、年配の方というのは、今とは違う時代背景の中で子育てを行っており、しかも当時は今のように電化製品もないし、非常に不便でした。しかし、彼らは子育てを投げ出さず、一生懸命やってきました。ところが、こうした年配の方から見れば、今の若い人たちは責任感がないということになります。そういうスタンスで今の若いお母さんを見ているものですから、善意で援助しようと関わっていても、なかなか上手いきません。若いお母さんからすると、そういう年配の方は煙たくて仕方がないわけです。従って、援助に関わる時には常に時代と生まれ育ってきた背景が違うのだという認識のもとに支援していく必要があるかと日頃から思っております。ただ今のご意見をお聴きして、このことを思い出しました。

安岡 結局人間のやることですから、いいことも、悪いことも同時に起きるといってお話をしたつもりです。いいことを伸ばしていくのは大事なことです、それは放っておいてもいい。悪いこと、不適切なものに、人間は常に注意深くならねばならない。こんなことを言うと宗教的

だと言われそうですが、自分の心に悪しき心があって、良いことをしようと思ってもついつい悪いことをしてしまう。厳しい内省のもとで、人間性を確立していこうとする。我々の周りにある攻撃性、マナーを守らないで良くないことをしてしまう。しかし、どこか人間というのは、自覚しながら生きているということに温かい眼差しを持っていなければならない。その眼差しを失わない限り、人類は何とかやっているといるだろうというお話をしたつもりです。

松本 本日のシンポジウムのタイトルは、「家族・学校・地域の再生を考える」という大変大きなものでした。お三方には重荷なテーマでご発言をお願いしたというのが、正直なところですね。それぞれのお立場から、現代の家族あるいは人間というものをどう捉え直すかに鍵があるのご発言されたと考えています。家族や地域の変化は、近代化の中でかなりネガティブな側面が強調されますが、また同時に、人間を大事にするということに重きを置くという考え方そのものも、やはり近代の生み出したものであります。そうした社会の変化の中で、我々が獲得してきた人間というものに対する考え方、信頼、具体的に支えるための諸制度をもう一度見つめ直す。その中で、人間の能動的な活動なり経験をもう一度考え直す。そこに再生というものがあるのではないかということをお三方、あるいはフロアからのご発言を聴きながら、考えておりました。

手前味噌ではありますが、人文学部は現在4学科で、心理学、教育学、文化、言語、あるいは社会等々、様々な人間と社会に関する、それと人間の意識と文化、芸術も含めた研究者が集まっているところであります。もう少し人間について、あるいは人間が形作る社会について研究を深めていく、あるいは議論の場を設けるということは、大変意義があるということを改めて痛感しております。そうした意味では、人文学部30周年にふさわしい議論をいただき、内容あるディスカッションができたこと、感謝を申し上げます。

皆さん、長時間有難うございました。

当日配布された資料

資料(1) 村瀬先生の映像資料

地域社会の活性化 —自らをも生かし、他者をも生かす—

村瀬 嘉代子(北翔大学)

1. 人のこころと現代社会

こころとは具象化して捉えがたいが、人が自分自身をどう捉えているか、人や物、ことへどう関わるか、その関わり方に顕れている、といえよう。

自分の生を享受し、資質を応分に発揮し、相互に認め合い分かちあって、自分らしく生きられる。

- 地域社会の人間関係の崩壊が指摘されて久しい
- 職住分離、長時間勤務、不規則な勤務形態などが家族の生活、近隣社会のあり方を変えている

2. 工業化社会、近代文明の光と陰

- 利便性 対 人の感性、自発性
- 生産効率 対 ほどよい寛容さ、惻隠の情の摩滅
- 豊富な視覚情報の氾濫 対 受け身的となり、観察、発見、試行・探索、能動性等の減退
- 制度化された時間 対 個人の時、時熟、生きられた時間
- 合理的に、合目的にしつらえられた空間 対 可塑性のある空間、想像力を巡らして活用する空間
- 経済性という有形、無形の尺度 対 個人の尊厳性

3. 人間疎外が進む風潮にあって、ひとりひとりを尊重し、その個人のありかたの必然性をまず理解し、受け止めることを基盤とする臨床心理の営みは、生物を生物たらしめる水にも喩えられようか？

- 精神科医 青木省三の間

「心理療法とは何処に存在するか？」

村瀬嘉代子『心理臨床の営み』金剛出版、2006.

- 土居健郎「専門性と人間性」

1990年、日本臨床学会第9回大会記念講演

○ 知識や技法が人間性と表裏一体となる

4. 地域社会の中の間疎外を和らげるのは 基本は個人のありかたであろう

(総論賛成、各論反対、一般論としては正論を語り自分自身では引き受けない)

- 心理臨床家の特質の一つは、その専門性や専門的知識や技術が、人としてのあり方に支えられていることにあるのではなからうか

5. 職業人として、市井の一市民として

- 「社会的居場所のネットから抜け落ちかけている家族に出会って」
- 「子どもの塾ですか？」
- 「日曜日の昼食」
- 「養護施設の子供達や職員を招いて」

など

ご静聴有り難うございました

参考文献

- 村瀬 嘉代子『生活事象と心理臨床の営み』金剛出版、2008.
- 村瀬 嘉代子『心理臨床の営み』金剛出版、2006.

資料(2) 才村先生の資料

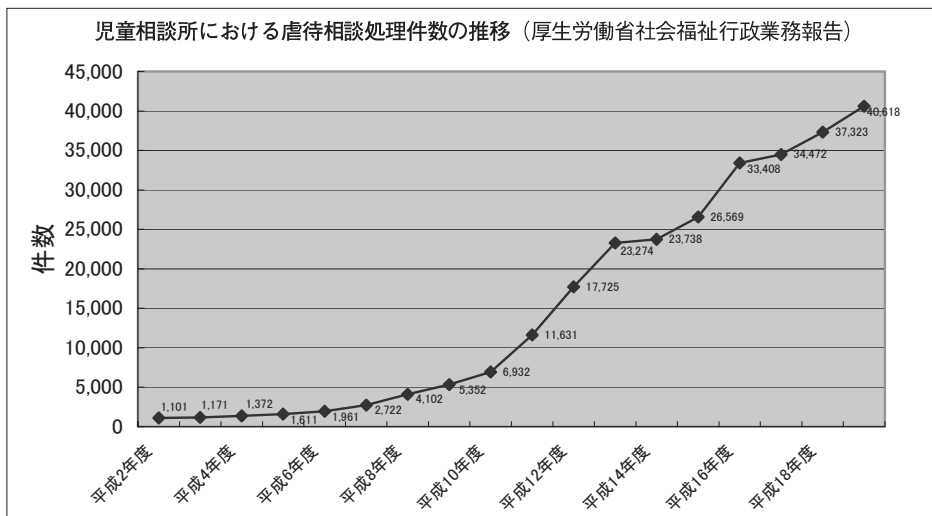
平成20年11月 8日

家族・学校・地域の再生を考える — 子ども虐待防止の観点から —

関西学院大学人間福祉学部 才村 純

1. 深刻化する子ども虐待問題とその背景

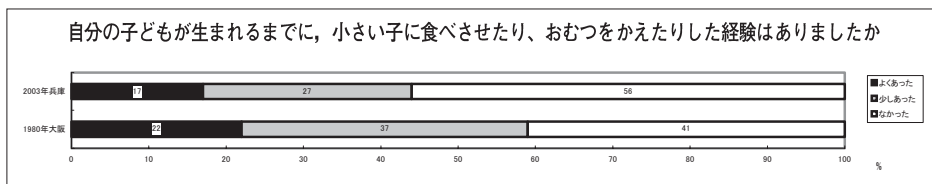
(1) 虐待相談の急増

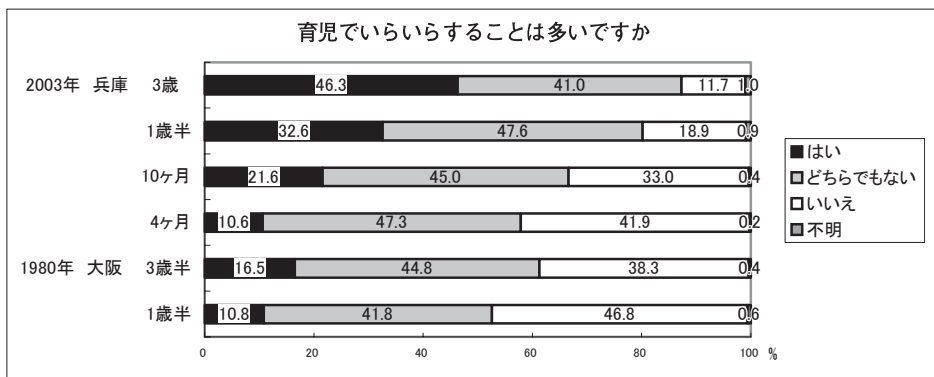
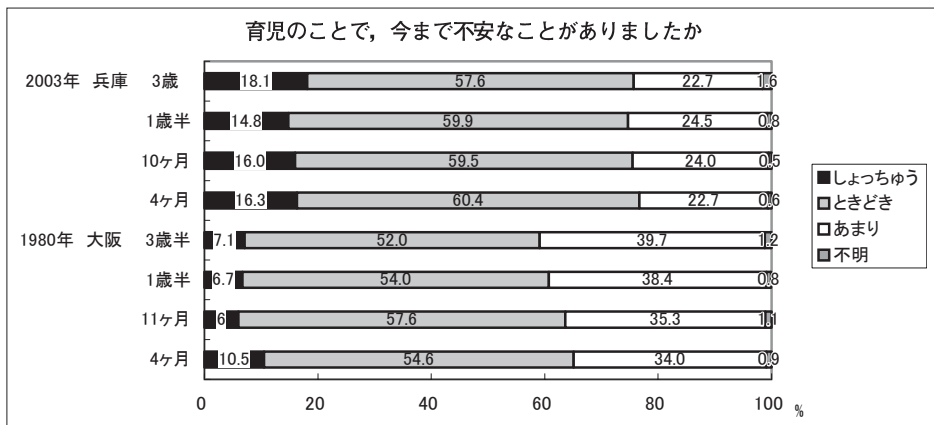
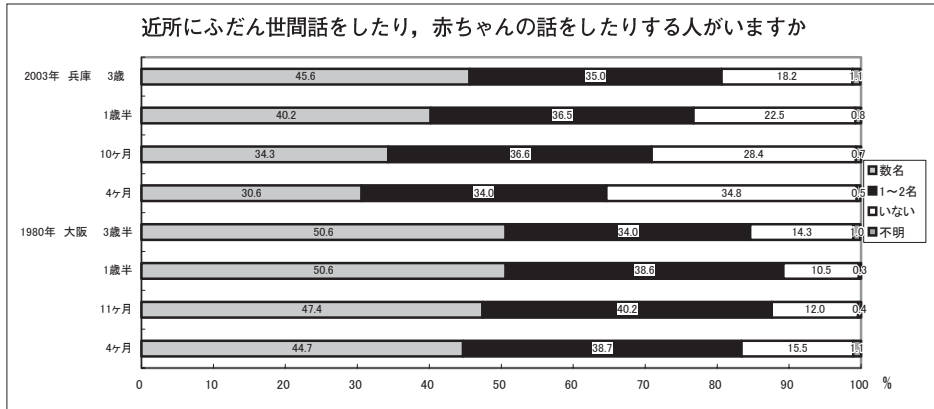


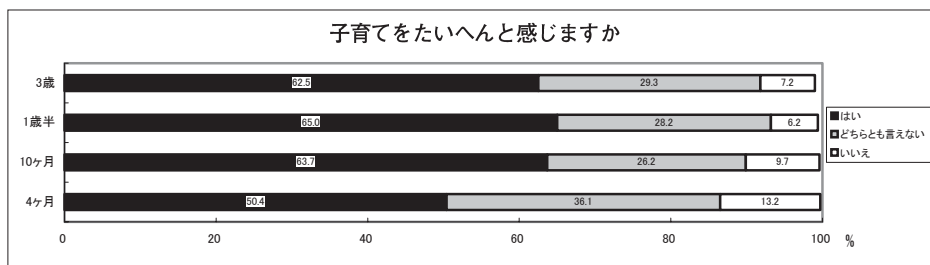
児童相談所における虐待相談件数の推移 (厚生労働省社会福祉行政業務報告)

(2) 最近の調査結果から

※原田正文, 山野則子他「児童虐待を未然に防ぐためには、何をすべきか—子育て実態調査『兵庫レポート』が示す虐待予防の方向性」、子どもの虐待とネグレクト, vol6, No.1, 2004. 5, 日本子どもの虐待防止研究会







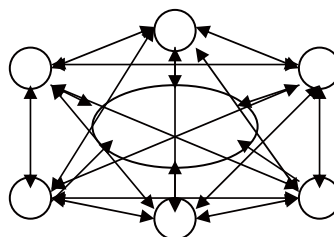
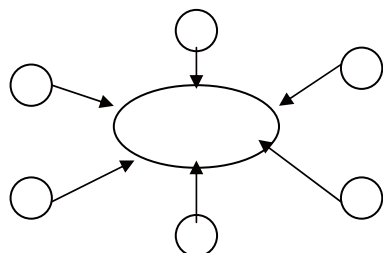
2. 変貌する家庭

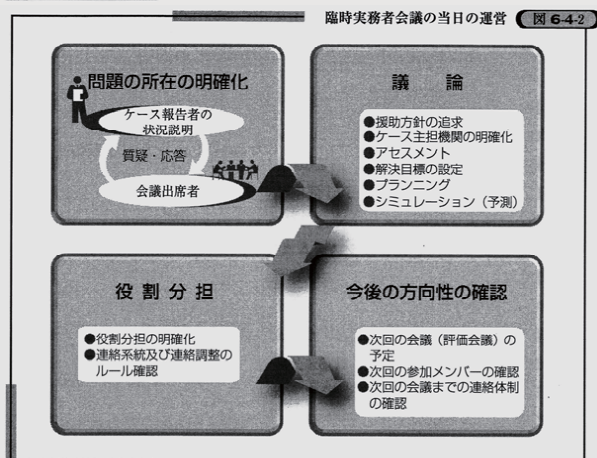
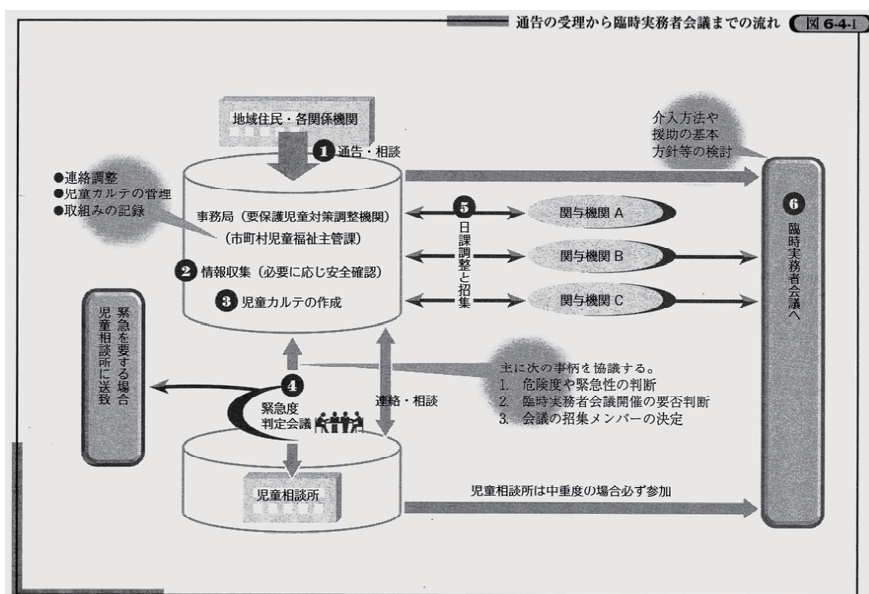
- ① 父親不在と母子の密着関係
- ② 深刻化する子育て不安と子ども虐待
- ③ 社会化機能の低下
 - ・ペット化させられる子ども（2つの悲劇）
 - ・親から放置される子どもたち
 - ・しつけ不在の家庭

3. 今の親が育った時代背景（モンスターペアレント考）

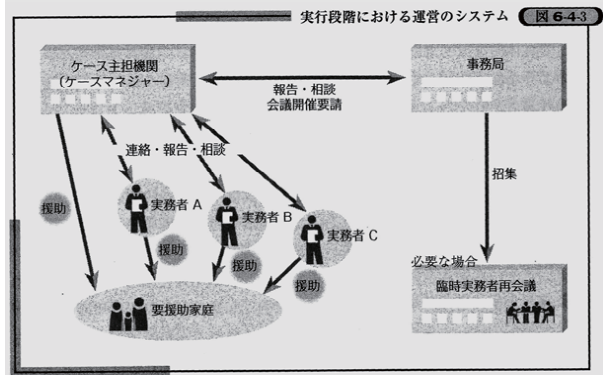
4. 今、何が求められているか（子ども家庭福祉の立場から）

- ① 子育て支援サービスの充実
- ② お節介型サービスの充実
 - ・育児支援家庭訪問事業
 - ・こんにちは赤ちゃん事業
- ③ 虐待防止ネットワーク（代表者会議，実務者会議，個別ケース検討会議）の効果的運営
- ④ 乳幼児とのふれ合いの機会の保障
- ⑤ 異年齢児・世代間交流の場の促進
- ⑥ 地域行事への子どもの参加の推奨
- ⑦ 子育ての社会化





(出所) 白樺裕・九鬼隆「行政を中心とした子ども虐待防止のためのネットワークについて」子ども虐待の予防とケアのすべて編集委員会編 (編集代表: 才村純)『子ども虐待の予防とケアのすべて』第一法規, 2003, 476頁より引用, 一部改変。



資料(3) 安岡先生のレジュメ

札幌学院大学人文学部創立30周年記念

平成20年11月8日

シンポジウム：『家庭・学校・地域の再生を考える』

於：SGU ホール

家族における人間の再生

札幌学院大学 安岡 譽

1. はじめに－「再生」の多義性

- ① 「再生」→ rebirth, regeneration, reproduction, resurrection, revival,
resuscitation, reclamation, ……………
“make a fresh start in life”, ……………
- ② 「もともと存在していたものに価値を認め、それを再びとりもどして、機能させること」

2. 家族の構造と機能, その変遷と危機

- ① 家族（家庭）の発生
人間が「自我」という精神装置を発展・維持させるうえで、「自我」の安全・防衛装置として「家族」をつくりあげた。
- ② 家族の役割
 - 1) 親子関係を中心に, 各自が成長・保護・養育される環境としての機能
 - 2) 家族の血縁関係を中心とした, 凝集性, 連帯感, 帰属・所属意識, その家系に代々続く歴史的意識の維持
 - 3) 「子どもが自分の家族に同一化し, 自分の家族への依存に安心感をもち, 新しい人間関係を形成してゆくことができるのは, ひとえに父母に対するエディプス・コンプレクス状況を克服することによってである。」(T. Lidz. 「家族と人間の順応」(1963))
- ③ 家族の変遷
(母系・父系家族) → 「大家族」 → 「核家族」 → (家族崩壊現象)
- ④ 家族の危機
 - 1) 家族関係の希薄化の進行
 - 2) 家族集団の解体現象
(離婚, 貧困, 差別, 家出……………)

3. 家族の危機とその対策

- ① 家族がもっている世代間伝達や継承の機能の回復
→とくに、「歴史的意識の回復」(→「家族歴史地図」(澤地久枝))
- ② 家族がもっているエディプス葛藤を解決する場としての家庭の機能の回復
→とくに、親の問題(親になること事体への準備と支援, および「子育て支援」)
→子どもへの“しつけ”と教育

4. おわりに

“家族の再生の基本は、人間そのものの再生にある。”

- ① 人間の過去, 現在, 未来。(時間軸の認識)
- ② 人間の「心の闇」(人間の醜い部分, 愚かな部分や攻撃性)を洞察し, それをふだんコントロールできるように学ぶこと。